

00

＊ ＊ 古都に響きわたる音楽万華鏡 ＊ ＊

“音楽の祭日 in 奈良女子大記念館” 多彩に (6月22日)

当協会が奈良女子大学仏文研究室との共催で、去る6月22日(土)に奈良女子大記念館で開催した“Fête de la Musique 音楽の祭日”は会場いっぱいの聴衆の参加を得て華やかなムードの中で多彩なジャンルの競演となりました。この「音楽の祭日」は1982年からフランスで始まったもので、夏至の日(Solstice d'été)に街中の会場や広場、通りを音楽で満たそうとする行事です。これは同時に奈良県の進めている音楽祭「ミュージックフェストなら2013」の一環にも組み入れられました。



重文指定の女子大記念館はクラシックな雰囲気を添えるにふさわしい会場で、演奏は午後4時に開幕し、先ずコーラスアンサンブル「夢」のみなさんによるミサ曲で始まりました。これに先立ち団員の一人でもある坂本当協会会長の主催者挨拶と奈良日仏協会の紹介がありました。続いて日本舞踊に移り、ここでは洋楽との融合を試みた藤間勘登美さんの踊りがバッハの曲にのせて演じられました。そのあと三木康子さんの未来志向をめざすピアノ演奏が続き、力強い表現で聴衆を釘づけにしました。さらに米澤朱美さんのヴァイオリン演奏とつづいて第一部は終わりました。[\[三木康子さんからのコメントは5頁に掲載\]](#)



第二部は変わらぬ人気のシャンソン歌手・梨里香さんがジャズ風の伴奏で独特のアンニュイを表現した曲の数々に聴衆はうっとり。次いで京都大リコーダークラブの部門別の長大な演奏はさながら西洋クラシック音楽史の復習会の様相を呈しました。このあと今井恵理さんのピアノ演奏と「郷」トリオによる管弦楽が続いて7時過ぎに閉演となりました。

参加者数 200 人余り。

(◆写真右上はコーラスの部で挨拶する坂本会長、右中はピアノ独奏の三木さん)



◆左上はヴァイオリン演奏の米澤さん、ピアノは三澤さん
右はシャンソンの梨里香さん (記念館 2 階ホールで)

名句の花束 フランス文学の庭から <28> 三野博司

L'essentiel est invisible pour les yeux.(3)
いちばん大切なものは目に見えないんだ。
(サン=テグジュペリ『星の王子さま』1943)

(副会長・奈良女子大学教授)

前号で、2011年12月ニューヨークの見知らぬ人から英語のメールが突然送られてきたと書きました。それは作家の草稿をあつかう業務を行っているA氏からのもので、「自分の顧客が『星の王子さま』のタイプ原稿を売りたいと言っている。箱根の「星の王子さまミュージアム」に話をもちかけたいと思うが、それについてあなたの助言をもらえないだろうか」という内容でした。

「星の王子さまミュージアム」は、2002年以来TBSの経営下にあり、その担当者とはかねてから面識がありました。そこで私が仲立ちして、A氏とTBSの交渉が始まりましたが、結局金額の点で折り合いがつかず、この話は流れました。ただ、A氏とのやりとりによって、いくつかの興味深い情報を得ることができました。

拙著『「星の王子さま」事典』（大修館書店）にも書きましたが、『星の王子さま』には手書き原稿の他にタイプライター原稿が三つ残されています。そのうち一つはパリ国立図書館、もう一つはテキサス大学にあります。3番目は、現在の時点で行方不明です。そして、今回のニューヨークの業者からの話は、この3番目のもののようなのです。

このタイプ原稿は、寡婦となったコンスエロが所有していた一連の草稿・デッサン類のなかに含まれていたようです。そして、彼女が1979年に亡くなると、それらの遺産は、1986年ジュネーブで売却されました。その後、1989年ロンドンで競売にかけられという記録があります。そしてさらに売却がおこなわれ、今の所有者の手に渡ったと推定されます。

サン=テグジュペリは、手書き原稿にもとづいて三つのタイプ原稿を作らせ、そのうち二つを保管しておき（これがパリ版とテキサス版）、3番目を自分の仕事のため使用し、これをもとに加筆をおこなったらしいのです。A氏からは、この原稿の13頁におよぶ売り立て用カタログも送ってもらいました。それを検討すると、第21章の有名なキツネのことばは、タイプ原稿でこうなっています。

« Ce qui est le plus important, c'est ce qui ne se voit pas. »

(いちばん大事なものは、それは見えないものなんだ。)

そして、この部分に棒線が引かれて、抹消された文字の上の行間に、サン=テグジュペリの自筆で記された次の文を読み取ることができます。

« On ne voit bien qu'avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux. »

(心で見なくっちゃ、よく見えない。いちばん大切なものは目に見えないんだ。)

『星の王子さま』といえはだれもがすぐに思い浮かべるこの有名な句は、この3番目のタイプ原稿においてはじめて、著者によって書き込まれたものだとわかります。

以上のことについては、より詳しい顛末を、フランス文学・文化の小冊子『流域』（青山社）第70号に書きました。すると、意外なところから反響があったのです。大江健三郎氏により、岩波書店の『図書』（2012年10月号）で、「短いがすぐに忘れがたいものとなるはずの指摘」として紹介されました。



Le 14 juillet (仏国祭日)前夜祭
開催される

ードイツ国旗も加わってー
(在京都フランス総領事館にて)

2013年、フランスの“国祭日”(Fête nationale)を祝うレセプションは、革命記念日より一日早く、7月13日(土)、在京都フランス総領事館(関西日仏学館)において開催され、奈良日仏協会からは、坂本会長、ジャメ副会長、野島理事、そして三野の4名が出席しました。

会場の稲畑ホールに入るやすぐ、いつもとは雰囲気

が違うと感じました。ドイツ連邦共和国の国旗が掲げられており、開会とともに君が代、ラ・マルセイ

エーズとともに、ハイドンの作曲になるドイツ国歌も流されたのです。

実は今年は、エリゼ条約（仏独協力条約）締結 50 周年に当たり、それを記念してドイツ総領事も招待されて、そのお祝いを兼ねていました。1870 年の普仏戦争に始まって、第一次、第二次大戦と仏独は 3 度も戦火を交えましたが、1963 年、当時のアデナウアー独首相とドゴール仏大統領がパリにおいて調印したエリゼ条約は、仏独間の和解の基礎を築きました。こんにち多事多難なユーロ圏の牽引役としても、仏独の協調は欠かせません。その意味でもこの条約は、ヨーロッパの安定にとって重要なものでしょう。



もう一つ、今年の Fête nationale を特徴づけたのは、Philippe JANVIER-KAMIYAMA 総領事が主催する最後の会となったことです。2009 年秋、着任してすぐの 11 月 4 日、総領事は奈良県知事への表敬訪問の機会にあわせて、奈良日仏協会の坂本会長、野島および三野副会長らとの会談にも出席されました。そして、4 年間の任務を終えて、今年 8 月末日本を後にして、次の赴任地インドへ向かわれます。6 年後には定年退職となるので、あとは京都に住みたいとの希望も表明されました。そのときには、日本人の奥様と、ゆっくりと奈良に遊びに来られる機会もあることを期待したいと思います。（三野記）[写真中央：ジャンヴィエ・カミヤマ総領事]



私とフランス

<<1>> 坂本 成彦 ②

質問 1. 会長がフランス国鉄で研修されて帰国後仕事面で直接的に参考になった点はありますか。

坂本: 当時日本ではあまりいわれていませんでしたが、先進国では少子化、人件費高騰の傾向が日本にもやがて来るものと考え、保線作業の機械化、近代化、線路設備の延命策を勉強したかったのと、組織、規定、基準など。他部門との横断的・俯瞰的な見方など参考になりました。

質問 2. フランスでも国鉄は慢性的に赤字経営と伺いましたが本当ですか、また対処方法は？

坂本: 公共性があり必要なものだから国の財政的補助は必須とされています。

質問 3. 最近気づいたのですが近鉄関係でフランス語のネーミングが目につきますね。Paradis とか Merci 街など・・・？

◆留学記録からの抜粋◆

『パリでの最初の食事はサンドとビール』

ホテルはパリ 15 区のメトロ駅のすぐ近くで、下町の商業地区らしく八百屋、パン屋などが軒を連ねる下駄ばきのビルの 4 階が私の部屋と決まった。その後はじめて夜のパリ散歩に出かけて、空腹になり、食堂さがしにやっきとなり居酒屋が開いていたので、食事はできるかと聞くと、サンドウィッチとハムにビールができるとのこと。・・・今でこそ日本は先進国であるが四十数年前では色々な違いが目についた。行列をつくるのもフランスが先だったようである。もう一つの違いは、今でもそうだがここでは見知らぬ人たちも出会えば「ボンジュール〇〇」や「オーヴワール」のあいさつを交わす。当時、“日本人とユダヤ人”がベストセラーになっていて、我々はこれで日本人の輪郭や日本で気づけなかったことを学んだものである。いまパリにいてそれが実感できるようになった。7 月 12 日にパリに来たのはパリ祭を前夜から体験したかったのがその理由。[次号へ続く]



フランス、カミュと私

各務 奈緒子 (会員)

私はフランス語を中学から学び始め、高校では第一外国語として選択し、仏語受験をして大学の仏文科へ進んだ。卒業前に大使館でフランス語力評価試験を受け、パリ第三大学仏語仏文科の学士課程に編入した。授業は1996年10月末に始まったが、それもつかの間の11月半ば、全国に波及するストとなった。教室にヘアバンド姿の学生が入ってきて、授業中止を叫び、交通機関だけでなく、大学の講義も即中止となった。大学でのストは留学前にも経験していたが、「鉢巻」をした学生は日本でもついぞ見なかった。これはいったい日本なのかフランスなのか・・・!? Le hachimaki は、日本漫画やアニメでフランスでも知られているのだが。

大学卒業後、大学院で勉強を続けながら非常勤講師も始めることとなり、2003年からは三野博司先生にカミュ研究の御指導を請うべく、奈良女子大学大学院博士課程に進学した。2006年には、フランス政府奨学金によるブザンソン応用言語学研究センター夏季フランス語教員研修に参加し、そこで新しい日本人像に遭遇することとなった。世界各国の教員が集うこの研修には、この年日本から11人が参加し、一ヶ月間フランス＝コンテ大学の寮のカップル用部屋に滞在した。この部屋には二人分の生活用品とダブルベッドがある。学生の身分で同棲を認めるとは、何とフランスらしい粋な計らいなのだろう。しかし、この部屋が日本人に割り当てられたのは、「クレマー」と捉えられたからだった。私たちはシャワーの温水が出ない、備え付けの皿や掛け布団がないなど、その度に連絡を入れる。何かが欠けることの多い寮では、二人部屋でようやく一人分揃うので、日本人に割り当てられるらしい。



2008年春、アルベール・カミュの墓のある南仏ルールマラン Lourmarin (写真左) を訪れた。タクシーの運転手は、その前の週にも日本人を乗せたと教えてくれた。日本のカミュ研究会の誰かが訪れたのだろうと思い、翌月の会で聞いてみると、誰も行ってはいなかった。では、誰が訪れたのだろう? 日本には、南仏にまで詣でるほどの熱心なカミュファンがたくさんいることに驚いた・・・。

ルールマランではカミュの家も見学した。これはカミュがノーベル賞受賞の賞金で購入したものだ。カミュの双子(男女)のひとり、娘のカトリーヌさんが現在も住んでいるので、興奮して騒がないようにとガイドに注意を受け緊張した。なぜなら、カミュの著作権所有者である彼女に嫌われると、研究に差し支えるかもしれないと思ったからだ。その訪問は研究ではなく家族旅行だったので、彼女に会う機会はなかったが、カミュ家の前に佇む猫に出会った。彼女の飼い猫だろうかと思いつつ・・・。

その4年後の2012年、私はカミュ家と同じ男女の双子を第二子、第三子に授かることとなった。カミュとの縁を感じ、嬉しくなった出来事であった。さて今年2013年は、カミュ生誕100年である。この先、フランス、カミュとのどんな出会いが待っているのだろうか・・・? (カミュの家→)



Lourmarin : Vaucluse 県にある町で Avignon の南東69kmにある。

「ジーパン」から「パステルカラーの綿パン」へ

小泉 辰朗 (会員)

フランスへの傾倒は米ミュージカル映画から

フランス語の学習をスタートしたいと思い、ジャメ先生とのご縁もあって奈良日仏協会に入会させて頂きました。会報の「モンナラ」前号にフランスやフランス語について、なぜ興味を持ちましたかという言葉がございましたので、私なりに少し文章を綴ってみました。

アメリカのミュージカル「雨に歌えば」「ウエストサイド物語」は、ご存知の通りミュージカルとして一世を風靡しました。記憶に残るシーンは、雨の中を歌い踊るジーン・ケリーであったり、ニューヨークのビルの暗い倉庫や下町で飛び回るジョージ・チャキリスであったり、モダンダンスもステップもバーンスタインの音楽も新鮮で、なんてカッコいいんだろうと思いました。映画の影響を受けて、友達とジーパンやトレーナーを買いにも行きました。そのスター二人が、アメリカからフランスのどこにもありそうな田舎町ロシュフォールにやって来て撮ったミュージカル映画が「ロシュフォールの恋人たち」(*Les Demoiselles de Rochefort*, 1967) なのです。



映画の内容は観てのお楽しみとして割愛しますが、テーマは「愛」と「お祭」です。映像の中には雨もなければ暗いビル群もなく、大きな川の上を移動する珍しい運搬橋、群青色の空、白い建物、色とりどりのパステル衣装のダンサーたち、それぞれのシーンで軽快なフレンチジャズの音楽家ミシェル・ルグラン(Michel Legrand) の曲で、「愛」や「お祭」を歌い踊り回ります。監督のジャック・ドゥミ (Jacques Demy) は、ふたりの米国人ミュージカル・スターを今までの主演作品とはまったく違ったイメージで起用し、フランス映画のベテラン男女俳優を絡ませ、主役にはフランソワーズ・ドルレアック (Françoise Dorléac)、カトリーヌ・ドヌーブ (Catherine Deneuve) の実姉妹を配し、《ミファソラミレ・・・》と口ずさむ「双子姉妹の歌」を歌わせています。



この作品がきっかけで、私はジーパンをやめてパステルカラーの綿パンを買いに行きました。フランスのミュージカル映画を通じて、「愛」を中心に回っている幸せな《フランス》を、思春期の私に感じさせてくれたことで、私はフランス好きになりました。いつかこの町を訪ねたいと思っています。みなさま、機会があれば、この映画を是非ご覧になって下さい。(←大河の上の運搬橋、長さ 140m で船舶の航行を妨げない高度に渡された桁からゴンドラが吊り下げられて人や車両が対岸まで運ばれる。映画では G・チャキリス一行とともに観客をロシュフォールの町に誘う橋で最初と終わりに登場する。【編注】)

♪♪ “音楽の祭日 (6/22)” 記事の続き ♪♪

ピアノ独奏・三木康子さんのコメント

デュティユーは、「ローマ大賞」を受賞したフランスを代表する現代作曲家で、先ごろ御年 97 歳で亡くなりました。当日(6/22)は、奇しくもお亡くなりになって 1 ヶ月たったその日でした。

「ピアノソナタ」は彼の代表作であり、1946 年から翌 47 年にかけて作曲されました。ニュアンスとディテールを精密さと論理を駆使しながら体系的に探求した名曲です。

第 1 楽章は、喜びに満ちた颯爽とした足取りの如く始まり、中間部の音響的色彩的美しさには、フランス音楽ドビュッシー、ラヴェルからの伝統の発展的なものが感じられます。

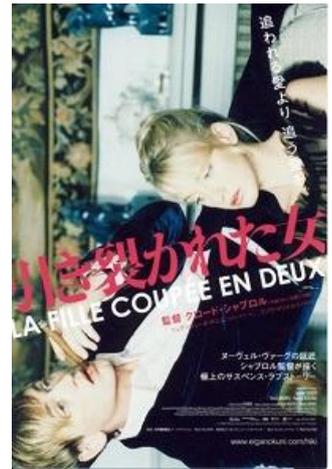
第 3 楽章は「コラールと変奏」でテーマが様々なリズムや変拍子により変容されます。凄まじい推進力と祈りです。

この曲を演奏すると、作曲家が表現したい心情や作曲家が生きたその時代の時代の様相が私には空気のごとく強く感じられます。それは、戦後からの復興、喜びであり、推進力をともなった急激な変化、そして犠牲者への祈りとなって、曲の中でさまざまに反映されて私の心に強く響いてくるのです。

こうした名曲が、いつまでも人の心に共感され、時代を経て受け継がれてゆくためにも演奏することの大切さや使命を感じました。

第31回 奈良日仏協会シネクラブ例会の案内

日 時 9月29日(日) 13:30~17:00
 会 場 奈良市西部公民館(近鉄学園前駅南) 4階第2会議室[予定]
 プログラム 『引き裂かれた女』(La Fille coupée en deux, 2007年, 115分)
 監 督 クロード・シャブロール
 参加費 日仏協会会員 無料 非会員 300円
 懇親会 例会終了後「味楽座」にて
 問い合わせ 浅井直子 Nasai206@gmail.com tel. 0743-74-0371



「フレンチ・サスペンス」特集も第3回目を迎え、今回はクロード・シャブロール監督の『引き裂かれた女』を取り上げます。シャブロールが満80歳で亡くなったから、今年の9月でちょうど3年になります。ヌーヴェル・ヴァーグを代表する監督であり、数々の素晴らしい作品を残していますが、日本では未公開作品も多く、映画作家としての全貌は、私自身いまだ十分にかみきれていません。そこで9月の例会では、現在パリで映画製作等の仕事に携わりつつも、奈良日仏協会の会員として会報が届くのを楽しみにしているという、ピエール・シルヴェストリさんのテキストによる助けを借りて、シャブロール作品の持ち味について考えてみたいと思います。

シャブロールは、若い頃からヒッチコックに傾倒し、サスペンスを題材にした作品をたくさん手がけていますが、いわゆる「サスペンス」の展開に対して、わざと関節をはずすようなプロットを用意します。あり得ないような事の運びで観客を驚かせたり、逆に期待されるようなシーンを省略したり間延びさせたり…。事件の謎解きや犯人探しよりも、登場人物たちの屈折した心理やその複雑さ、背後にあるブルジョワ社会の

欺瞞、官能的な男女の愛情のあり方などが、描き出されます。最終的には、犯罪そのものについては曖昧なままで終わり、人間のもつ不可解さ・不気味さが提示されることしばしばです。

『引き裂かれた女』では、高名な老作家でプレイボーイのシャルル・サン・ドニ(フランソワ・ベルレアン)が、テレビ局の天気キャスターをする若い娘ガブリエル(リュディヴィーヌ・サニエ)に出会い、大人の魅力とエロチスムで彼女を虜にします。一方、資産家の青年ポール(ブノワ・マジメル)も彼女に恋して言い寄るものの、シャルルに夢中のガブリエルは、彼を素っ気なくあしらいます。ところが、シャルルにとっては自分が一時の火遊びの対象でしかなかったことを知ったガブリエルは、深く傷ついてポールの求婚を受入れます。すると彼女に待ち受けていたのは……!?

ピエールさんからは、この映画の紹介文を寄せていただいています。「奈良日仏協会」のホームページ(<http://www.afjn.jp/>)に、フランス語とその訳文を掲載していますので、ぜひご覧になってください。

第114回 フランス・アラカルトのご案内

日時：9月19日(第3木曜) 15時から
 会費：会員 1000円、非会員 1500円(ケーキ・飲物共)
 場所：カフェ Mardi Mardi (マルディ マルディ) (TEL&FAX : 44-5701)
 奈良市登美ヶ丘3-12-9 登美ヶ丘ビル1F ○学園前駅からバスで7分、西登美ヶ丘二丁目バス停前
 駐車場有り ※参加申し込みなどは日仏協会事務局 (0743-52-3939) まで
 ホームページ：“奈良日仏” ou “日仏アラカルト” で検索 
 今回のゲスト：
 Oussouby Sacko(Dr.)さん (京都精華大学人文学部総合人文学科准教授。
 マリ共和国出身。マリは人口約1100万人 首都：バマコ)

◆ 113回 フランス・アラカルトに参加して

中田由美子 (会員)

昨年秋に日本人男性と結婚されたフランス、ベルサイユ近郊出身のイザベル・ルグランさんを囲んで、7月18日に開催されました。2011年に続き(その時は、大学で学ばれた出版学についてお話しいただきましたが)2度目の講師です。

ご主人は料理の腕も良い、色々心遣いをしてくれるいい旦那さんだそうで、新婚の幸せぶりが伝わってきました。神社で日本式の結婚式を挙げ、日本料亭で盛大な披露宴も開かれましたが、日本では二重国籍が取れない為(フランスではOK)フランス国籍のままとのこと。

これから子供を持つことになるでしょうが、フランスと日本との違い—出産方法(フランスでは無痛分娩が普通)や子供の教育方針(概して日本は子供に寛

容だが、フランスでは小さい時ほどしつけは厳しい)など—に対する不安を話されました。—という彼女は、京都清水寺近くに住み、生け花や着物の着付けもたしなみ、関西弁も喋れる、かなりの日本通のようです。

最後に、仲井さんのギターの音色をバックに、イザベルさんが朗読するポール・ヴェルレーヌの詩(Le ciel est sur le toit).とthéを味わい、暑い暑い一日の終わりに、キリッと爽やかな余韻が残るひとときでした。



会員主催講座訪問 -①-

「フラワーアレンジ」の手芸講座より

三浦 真弓 (会員)



私たちの講座の古川さやか先生は、奈良日仏協会の会員で、奈良と京都の境目で VERT DE GRIS という花カフェと雑貨とフラワーレッスンのお店を運営されています。雑貨を使ったフラワーアレンジ・レッスンなど、先生のナチュラルなセンス溢れるレッスンは大人気です。

7月20日に行なわれた第18回目の講座では、鳥かごにブリザーブド・フラワーやドライ・フラワー、木の実をたっぷり使ってアレンジをしました。とっても可愛く仕上がる先生のレッスン。お花に触れる機会を持つと心がなごみますので、いつもこの手芸講座を楽しみにしています。フランス語は出来ませんが、手芸講座を通してもっとたくさんの会員の皆さんと楽しい時間を過ごせたらと願っています。今回は「カルトナーージュ」のレッスンが、8月24日(土)にありますので、こちらもとても楽しみです。



時間・会場・連絡先等は、講座表をご覧ください。

はじめまして、もしくはお久しぶりです!

仲井 杏奈 (会員)



このたび5年ぶりに奈良日仏協会に再入会させて頂きました。はじめて会員になってから、ちょうど10年の月日が経ちました。その間、パリやブザンソンに留学したり、フランス映画に主演するなど、フランス語やフランス文化に触れるたくさんの機会を持ちました。さまざまな国の人とフランス語で交流したり、19世紀フランス詩にのめり込んだりする中で、素晴らしい出会いにも恵まれました。現在、いろいろなどころでフランス語を教え、翻訳や執筆修行に取り組む毎日です。趣味としてバレエを習っています。

この春から、奈良ウェルネスクラブにてフランス語講師をしています。担当している講座では、初級～中級者を対象に、フランス語会話や文法をはじめとして、現代の若者文化やライフスタイル、古典文学やラテン語との比較まで、幅広いフランスの魅力を知っていただくように心がけています。むずかしいと言われる発音は、口の仕組みや構造を考えながら自然なリズムでなじめるように、楽しんで覚えてもらえるように工夫しています。外国を知ることは、日本を再発見することにもつながります。フランス語や文化の話をしていく中で、同時代の日本との比較をしたり、日本文化が与えた影響についても考えていきたいと思っています。どうかみなさまよろしくお願ひ致します。(奈良ウェルネス倶楽部ほかフランス語講座講師)

◆理事会の報告から◆—事務局—

第4回理事会が開催されましたので、その概要をお知らせします。

日時：7月25日（木）15:00～17:00、場所：菜宴

出席者：坂本、三野、濱、浅井、井田、仲井、中浦、中野、樋口、三木、森井 及び、藤村久美子会員（議題1に関しゲスト参加）

▽議題(1) 秋のイベント（11/23、榛原で開催予定）：前回に引続きイメージの具体化のため協議。教養講座は、「日本の秋とフランスの *Autumne* の違い」をテーマとした講演を聴きたい。ボジョレーを楽しむ会（パーティ）は、地元の個性派そば屋で料理を準備することを想定。音楽などアトラクションも入る。その間に見頃を迎えた庭の紅葉を楽しみ、茶席でお茶をいただき、地元日本画家の絵画などを鑑賞する。今後は運営委員会で内容を煮詰め、次回理事会に諮る。次号 *Mon Nara* に予告案内を出す。

▽議題(2) 6/22「音楽の祭日 in 奈良女子大記念館」を振り返る：当協会会員が参加する演奏が半数あり、聴衆も多く全体としては成功であった。但し、以下のような反省点が残った。“Musikfest なら”の主催者(奈良県)から条件づけられた事前申込み方式が足枷となり様々な混乱が生じた。開催直前までプログラムが固まらず説明に窮した。ある団体による演奏が長すぎ、演奏者側による説明もくどかった。

▽議題(3) 20周年記念事業の準備：意見交換により以下のような方向性を得た。9月着任予定の新総領事に主賓としてまた記念講演の講師としての参加を打診し、来年4～5月をめどに記念式典及びパーティ【祝賀会】を開催する。式典・記念講演の会場は奈良女子大学記念館を使わせてもらい、パーティは学内の「ラウンジ」で行うことを想定。式典・講演は無料で一般参加に開放するが、祝賀会は会費制で会員と関係者のみ。

その他：奈良名作映画祭の会議、参加報告。次号 *Mon Nara* の進行状況の確認。フランス人学生の奈良訪問への対応、経過報告。次回理事会の日程調整。 [文中敬称略]

〈フランス・アラカルト 今&昔〉 (4) par 仲井秀昭

すでに113回を迎えたフランス・アラカルト、過去に印象的だった集まりを振り返ります。特に2004年は岡村会長のもと、さまざまな企画に取り組んだ年でした。▼何度も登場頂いている三野博司副会長ですが、第89回フランス・アラカルトでは「パリのモーツァルト」と題して、音楽ファンには絶好のプログラム、あの天才モーツァルトの転換期となったと言われる3度目のパリ滞在を語り、聴きました。(6/18でピアノは村穂美恵子さん、場所は秋篠音楽堂)。曲目は：ピアノ・ソナタ第12番へ長調 K332と第11番イ長調 K331 より第3楽章(トルコ風)

▼三野先生の言葉「モーツァルトは生涯に3度パリを訪れています。最初は1763年、6歳の神童として登場し、パリの人々を驚嘆させました。2度目は1766年、9歳の彼は、ロンドンからの帰路、ふたたびパリを訪れます。3度目は1778年、21歳の彼は、就職活動のためパリを訪れますが、同行の母が客死する悲しい旅となりました」

▼同じ2004年2月のフランス・アラカルトはひと味も二味も違いました。なにせ、テーマは万葉集でした！

企画担当：岡村会長の弁：「あおによし、奈良の都には LOVE がいっぱい。日本のいにしへのラブロマンスを語りましょう」講師は奈良大学文学部国文学科教授 上野誠氏でした。(以下次号)

◆当協会では**会員を募集**しております。今年から法人会員の年会費が大幅に値下げされ自営業の方等の入会が容易になりました。本誌では会員関連の記事や、お店情報を掲載いたします。

◆本誌への投稿[特に新鮮で多様な話題など]を歓迎します。締切日：次号は **9月末日**が締切日です。

編集後記

▼先日NHKに対して「カタカナの新外来語を多用する風潮が盛んで理解するのに精神的苦痛をうけた」との訴えをした人がいる。確かに、いい訳語を探す努力をさぼって単に発音通りをカタカナに変えるだけの風潮が、特に官庁、IT業界の従業者などに多いのも事実である。◆例えば、コンテンツ：これは「中身」と同じだし、コンプライアンス：「法令順守」でいい。最近TVで一躍人気を得たフランス語にコンシエルジュ、ノマド、トリアージュがある。◆最近の映画のタイトルは外国語を発音通りカタカナにしたものが多い(例：Back to the Future)が昔は、”Love is a Many Splendored Thing”を「慕情」という魅惑的タイトルで売り出したので観客動員数が大きく増えた経過がある。この傾向は、映画の配給会社が先方の制作会社から原語に近いままで、と縛りかけられている為らしい。もし、現在なら、上の映画は長大な名称となって広告する方も大変なことになったかも知れない。(T.Nakaura)

Mon Nara juillet-août 2013 **7-8月**合併号 Numéro257

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : afjn_info@kcn.jp TEL&FAX 0743-52-3939

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第30号[郵便物のみ] 発行責任者：坂本成彦